

高校家庭科「子どもの発達と保育」におけるキャリア教育 —高大連携事業の実践と検討—

五十嵐 紗織

I. はじめに

中央教育審議会（答申）において、学校と社会及び学校間の円滑な接続を図るためのキャリア教育を小学校段階から発達段階に応じて実施することの必要性が掲げられ¹、「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育²」としてのキャリア教育の意義や必要観が高まっている。本研究では、将来への見通しを持った高校生のキャリア教育の一環として、高大連携事業の可能性に着目したい。高校生のキャリア教育と高大連携事業の取り組みに関しては、酒井らの研究が参考になる³。酒井らは、高校が主体となった実践を研究することで、高大連携の枠組みから高校の教育実践をとらえることを試みている。その中で、課題はあるものの、キャリア教育によって高校生に将来展望を明確化させることが可能であることを明らかにした。

キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書⁴における高校調査によると「キャリア教育を適切に行っていくうえで今後とても重要になると思うこと」として、46.2%が「キャリア教育に関わる体験活動を実施すること」を挙げている。加えて、担任調査でも、同様の項目において、46.3%が「就業体験（インターンシップ）や社会人講話など、キャリア教育に関わる体験的な学習の充実」について「とても重要だと思う」と回答している。つまり、高校では生徒の体験を伴うキャリア教育のより一層の充実が必要であると考えられている。

ところで、家庭科教育においては、すでに「育てられている時代に育てることを学ぶ」ことの重要性が広く浸透している。これまで自分が育てられてきた（現在まで育てられている）時期であることを認識し、社会的な意味を持って自分より幼い命を育てていく立場に今後なっていく事を学ぶことである。中でも、乳幼児とのふれあい体験を通した学習の効果が高いことが明らかになっている^{vi}。数多くの先行研究から、中学や高校生といった多感な時期に幼い子どもに接することで、自己肯定感を育んだり、職業選択も含めた自身の将来の生活像を描いたりすることが可能となることが指摘されている^v。

くわえて、保育や福祉、男女や家族の関係などを題材に、生活における諸問題について議論し探求する家庭科の学習が、自分と異なる価値観や考えを持つ他者を理解し尊重するとともに、自分の意見を表明し、他者と共によりよい方向性を見出す力の育成に優位に関連することが明らかにされている^{vii}。

このような面から見ても、家庭科教育は生活に密接した教科として、キャリア教育の推進に大いに貢献できる可能性を秘めている。志村は、キャリア教育の中でも職業生活・家庭生活・地域生活といったライフキャリアの実践の不足を挙げる。自立という観点を直接的に捉える家庭科教育で、ライフキャリアの視点を伴う指導が十分機能されていない点を指摘している^{viii}。真中・志村の大学生を対象とした調査より、家庭科学習の重要性は認識しているが、家庭科と生活設計や将来について考えることとは関連付けてとらえていないことが示されている^{ix}。すなわち経済・精神を含む生活の自立に向けた将来的展望を描くために、家庭科教育におけるキャリア教育のより一層の充実が必要であることが示唆されている。

ここで、信州豊南短期大学（以下本学）における高大連携事業について簡単に紹介したい。本学は、近隣の長野県岡谷東高等学校（以下岡谷東高校）と連携し、短大での学びを高校生に会得してもらう機会を提供している。岡谷東高校との高大連携は、本学幼児教育学科と専門家庭科目「子どもの発達と保育」との授業間でスタートし、現在では言語コミュニケーション学科でも英語の授

業を対象とした連携事業が行われるようになっていく。

本研究の対象としている、保育の分野における高大連携事業の生徒の学びの充実と円滑な運営に関する研究は管見の限り見当たらなかったが、他分野ではその取り組みの成果も報告されている。たとえば、附属高校との連携によって新たなジェンダー教育カリキュラムの開発・研究を行っている内田らは、ジェンダー教育の授業において講師の意図や熱意が生徒にうまく伝わらなかった点などを改善しながら、生徒の満足感を上げられるように変更を加えて実践を行った^x。そこから、生徒自身が考え、理解する時間が十分に持てるような進行や、講師への親しみやすさ、高校の50分授業に対応したまとまりのある内容、もしくは2コマ連続で行い高校での通常の授業では得られないような知識を体得できる授業であれば、生徒の評価は高くなり、高大連携としての効果が発揮できるとする。

また、北村らは、大学が主催し学外の施設を利用して行った大学公開講座に調査モニターとして参加した高校生に対する調査から、高大連携事業への見通しを模索している^{xi}。その調査の中で、高校生が期待していることとして、より深い専門的知識の獲得、より広い教養の獲得、より実践的な知識術の習得、大学の学びの体得を挙げ、さらに大学生活の実際に近い形で公開講座を受講したいという要望が多く見られたことを明らかにした。さらには、高校生を対象とした公開講座の意義として大学の研究・教育成果を広く地域に開放すると同時に、特定の領域に高い関心を示す高校生への情報提供、くわえて志望学生の獲得や講義内容・方法の改善情報の獲得といった意義も明らかとなっており、本学の高大連携事業にも通ずる可能性が示唆された。

II. 目的および方法

本研究の目的は、キャリア教育を視野に入れた高校家庭科「子どもの発達と保育」における高大連携事業の在り方について、実際に授業を受けた生徒への調査を通じて検討を加えることである。家庭科におけるキャリア教育は、生活者の視点を重視し、職業人養成のための基礎教育ではなく、ライフワークバランスを自ら適当に保つことができる社会人を育成するという観点に立つ。そこで、幼児教育学科の教員による授業が高校生の社会的・職業的自立に向けた意欲形成にどのように影響するのか調査することにより、高大連携事業の今後の在り方への示唆を得ることを目的に、本研究を行うこととする。

研究の方法は以下の通り。2015年5月27日に岡谷東高校で行われた50分×2コマの授業終了後、無記名自記式質問紙調査を実施。回答者25名(回収率100%)。授業内容は、KJ法を用いて、「子どもにとって遊びはどんな意味があるのか」について考えることを中心とした。質問内容は、1. 幼児期にした遊び。2. KJ法を行って気付いたこと、3. 授業全体の感想である。本論では、紙幅の都合上3の感想のみ紹介する。

続いて、2015年6月11日に、本学において今年度第3回目高大連携事業を実施。すべての日程終了後、27名を対象に無記名式質問紙調査を実施した(回収率100%)。質問内容は、1～4が本日の感想・評価等、5・6が家庭科教育に関する内容、7が自由記述である。

なお、6では学習指導要領の内容に沿って質問項目を作った。しかし、生徒が学習指導要領の内容まで把握していない点や、学習指導要領の項目タイトルだけでは生徒が具体的内容まで想起することは難しい点などに考慮して、学習指導要領の文章を基に次のような説明文を加えた。ア:子どもの発達の特性(説明:子どもが人間として発達していくことはどのような意味があるのか?)。イ:子どもの発達過程(説明:子どもの心や体の成長、人とのかかわりについて)ウ:子どもの生活(説明:子どもの日々の生活や健康管理、事故防止について)。エ:子どもの保育(説明:保育所などでの保育がどのように行われているか)。オ:

子どもの福祉と子育て支援（説明：子どもを社会全体の宝として大切にすること、子育て支援の現状）。

2回の調査それぞれの実施に先立ち、高校での授業や成績評価等に一切関係のない任意の調査であることを説明し、同意を得た。なお、調査対象数が異なっているのは、欠席した生徒がいたためである。

III. 結果および考察

1. 2015年5月27日の授業

ここでは、KJ法を通した生徒の感想を掲載する。なお、文章は生徒の記述のまま、漢字等修正は加えていない。今回の連携事業に対する生徒の意欲は高く、多くの生徒の記述欄は字で埋め尽くされていた。今回は、その一部を紹介する。

- 意見や発表は普段あまりやらないので慣れていなかったけれど、自分たちから意見を出し班の人と話し合いまとめて発表することができたので良かった。子どもたちのことをもう一度深く考え直すことができた。子どもは子どもたちの世界で生きているんだと思いました。
- 今回のテーマで「子どもにとって遊びはどんな意味があるか」だったんですが、私は全然考えたことがありませんでした。でも改めて考えてKJ法でグループで話し合ってたくさん考えることができました。「子どもは遊びがすべて」と学び、子どもにとって遊びはとても大切なんだなあと改めて思いました。
- 「子どもにとって遊びとはどんな意味があるか」小さい頃、この意味なんて全く考えもしないし、高校生になってもこの授業がなければ考えなかったです。子どもにとって遊ぶという事は子どもの時のお仕事なんではないかなあとも思いました。大人が「こうしなさい」と言っても子どもには子どもの世界があるんだという事が分かってよかったです。
- KJ法で書いたのは～を知ると、学びのことばかり探して書いていたけれど、授業を聞いて「子どもにとって遊ぶこととは“生きている”ことそのもの」

と出てきて、ほんとうにそうだなと思いました。子どもの頃は何をしても楽しくて好奇心が強かったなと思いました。

- 大人からしたら、子どもは遊んで学んでいるなあと思うと思います。でも、子どもからするとただほんとにただ遊んでいるだけだと思いました。それがいつの間にか学びとして身につけているのではと思いました。K J法は案を出すのが大変だったし、まとめるのもすごく難しかったけど、他の人の意見が聞けたのでいい方法だと思いました。
- 子どもにとって遊ぶ意味は私たちからしたら“学ぶこと・成長すること”だと考えます。でも、子どもからしたらそういうことではなく生きることと同じことだと聞いて、少しでも子どものことを知ることができてよかったです。そして、大人目線からだけでなく、子どもの目線から、子どもの感覚で子どもと触れ合えるようにしたいです。



- 今はもう子どもらしい心を忘れかけているけれど、子どもの頃感じた“感動”とか、初めて知った時の“おどろき”を今でも感じることができるから、やっぱりそんな気持ちを感じるとワクワクして楽しくなるから、せめてこの気持ちは忘れないようにしたいなって思いました。
- 大人は子どもが遊びを通して学んでいると考えますが、子どもはそんな事考えていなく、子どもにとって遊びは生きていくことそのものと聞き、そういえば子どもの頃なんか何も考えていなかったなと思いました。
- 子どもは子どもなりにいろいろ感じ、考えていると思います。子どもと関

わる中で、生きているときの楽しさを共有できれば良いなと思えることが出来ました。小さいときは遊びに精一杯で、悪い事をしたのも覚えています。それでも大人が怒って改めて悪い事だって知りました。大人の中にある規則を子どもは破ってくれて、その中で学び・喜びなどを知っていく事が素敵な成長へ行くんだなあと思うことが出来ました。

大半の生徒が、K J法による学習は初めてだったようである。そのためか、「K J法をやると友達とのかかわりがふえるなと思いました。とてもたのしかったです。」(生徒感想、原文ママ)というような、普段の高校での授業とは異なる授業方法への感想も寄せられ、授業への積極的な姿勢が見られた。他の生徒のコメントの中にも、今まで考えたことがなかった、班の人と話し合いをまとめることが初めてだった、というような記述もみられ、高等教育を紹介するという目的も達成できた様子が窺える。大学側が一方向的に発信する早期教育のような講義ではなく、高校生が展望をもって自分の考えを構築することができる礎になり得る内容であったことが示唆された。

今回の授業におけるねらいとして、子どもたちにとって、遊び自体が生活そのものであり、遊びは生きていることの証であるというメッセージを発信することを位置付けた。子どもに限りなく近い世代の生徒たちに、子どもの遊びの意味を柔軟な発想でとらえてほしいと考えたためである。付箋紙に「子どもにとっての遊びの意味」を書き出す際、生徒の多くから「遊ぶことで何かを学ぶ」という意見が散見されるであろうことは予測に難しくなかった。さらに、模造紙での各グループのまとめの中にも、「遊びは学び」という項目ができるであろうことも想定していた。もちろん、意欲的に保育を学ぼうとしている高校生が感じている「遊びは学び」という概念を否定するつもりはなく、K J法の中で自由に考え、意見を言い合うことを指導した。十分な議論がなされた後、授業のまとめとして、子どもたちが生き生きと遊ぶ写真を見せたり、子どもたちの素直な気持ちが吐露された詩を紹介したりした。生徒からは笑い声も聞かれ、

子どもの遊びの中で沸き起こるありのままの姿を伝えることが出来たように感じた。上記で紹介したような感想の中にも、その理解に関する記述が多く見られ、本授業のねらいが達成されたことが推察される。

一方、「遊びということはただ楽しいからとかではなく、遊ぶことによってコミュニケーション力や能力がついていろいろ成長していくんだなと思いました（生徒感想：原文ママ）」というような、筆者が本来意図した学びの到達点に達することができない生徒もおり、指導不足を痛感した。今年度の筆者の担当する授業はこの授業1度きりであったため、このような生徒に対するフォローアップが十分にできなかったことは反省点として改善の余地が見いだされた。

2. 2015年6月11日の連携事業

今年度の連携事業で唯一、本学の施設を使って行われた。当日は、生徒は高校からバスに乗って来講。体育・造形の授業を大学の施設を活用して受講し、さらには岡谷東高校の卒業生で現幼児教育学科の学生との交流会の時間を設けた。その中で、学生生活や実習の様子などについて、大学の教員が紹介するのではなく、高校の先輩から大学での学びやキャンパスライフについて話が聞けるように企画をした。最後に学生が学内を案内し、まとめと本調査（任意であることを説明）を実施後、バスで高校へ戻るといふ、生徒にとっても一日がかりの連携事業である。

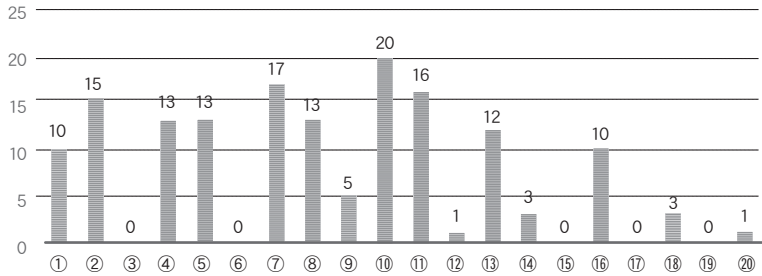
それでは、質問紙調査の結果を紹介し、わずかながらではあるがそれに対する考察を加えたい。「今日の連携事業全体の感想」については、21名（77.8%）が「大変よかった」と回答し、6名（22.2%）が「よかった」と回答した。「あまりよくなかった」「よくなかった」を選んだ生徒はおらず、今回の連携事業が概ね生徒にとって満足のいくものであったと推察される。

今回の内容について、その感想を複数選択可で尋ねたところ、図1のような結果を得た。最も多かった意見は「⑩先輩や先生の雰囲気よかった」（74.1%）であり、「⑦内容がわかりやすかった」（63.0%）、「⑪大学の雰囲気がよかった」

(59.3%)、「②高校ではあまりやらないことなのでよかった」(55.6%)と続いた。他の回とは異なる大学での開催という事もあり、大学の様子に触れられたことに関する意見が多く寄せられた。大学の施設での授業や先輩との交流を通じ、専門教育への理解や憧れを抱き、さらには生徒自身の将来への展望を持つきっかけになったことが示された。当日は、バス移動を含めて慣れない環境での学習で、生徒には普段の授業以上の緊張と負担があったのではないかと思われる。それでも、大学の教員が“出前授業”をするだけでなく、双方の学校のよさを活用した授業を行う高大連携事業の形式が、生徒から高い評価を受けたといえる。

くわえて、「④今後の進路の参考になった」「⑤自分の将来にいかしたい」「⑧保育についてもっと学びたいと思った」の項目を選択した生徒は、それぞれ回答者の約半数の48.1%（13名）に上った。高校では、教科担任と学級担任とが異なる場合が大半であるため、生徒の各教科での興味関心を直接的な進路指導に生かすことは簡単な道のりではない。このような高い意欲を持った生徒に対する、高大連携事業の中での継続的な支援が、今後の喫緊の課題といえる。

図 1 短大での高大連携事業の感想 (N=27 複数選択)



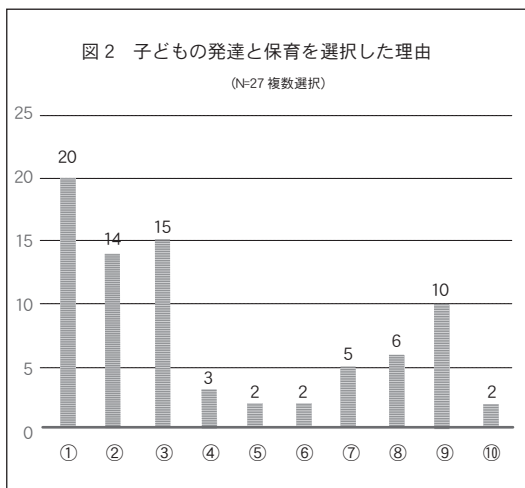
| | |
|-----------------------|-----------------------|
| ①今後の勉強にいかしたい | ⑩大学の雰囲気がよかった |
| ②高校ではあまりやらないことなのでよかった | ⑫大学が遠かった |
| ③高校で習ったことが今日の授業にいかされた | ⑬大学の様子がよくわかった |
| ④今後の進路の参考になった | ⑭大学の様子をもっと知りたかった |
| ⑤自分の将来にいかしたい | ⑮時間が長かった |
| ⑥内容が難しかった | ⑯時間はちょうどよかった |
| ⑦内容がわかりやすかった | ⑰時間が短かった |
| ⑧保育についてもっと学びたいと思った | ⑱もっと先輩と話したかった |
| ⑨大学の他の授業も受けてみたいと思った | ⑲授業中にもっと発言や質問できればよかった |
| ⑩先輩や先生の雰囲気がよかった | ⑳その他 |

家庭科教育に関する内容として、まず、どうして「子どもの発達と保育」の授業を選択するに至ったかを複数回答可で尋ねた(図2)。最も多かったのは「①保育に興味がある」(74.1%)、続いて「③将来の生活に役立ちそう」(55.6%)、「②保育者や幼稚園教諭を目指している」(51.9%)であった。

多数開講される選択授業の中から、自ら選んで受講しているため、保育へ強い関心や興味をもっていることがわかる。自分の将来と子どもとの関連性について、前向きにとらえている生徒が多いともいえる。特に、受講年次が3学年であるため、職業的・生活的の両面から将来への役立ち観が期待されていることがわかる。

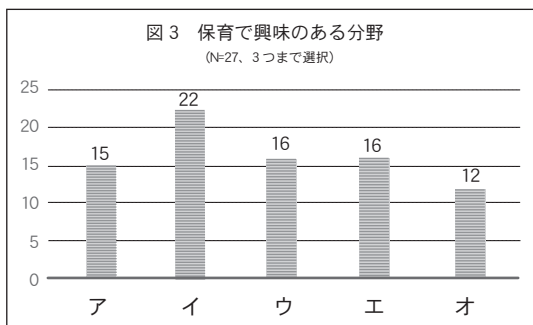
とりわけ注目したいのは、受講生の約半数が、職業として保育の道を目指しており、明確な職業選択への意欲を持っていることである。生徒自身が、家庭科教育での学びを自分自身の職業選択と具体的に結び付けているとみられる。キャリア教育の一端の担い手を目指す高大連携の取り組みとして、保育者への志を持った生徒に大学としてどのような支援や教育ができるか、考えていく必要がある。

さらに、「⑨実習に行きたい」と答えた生徒も10名(37.0%)おり、授業の一部に位置づけられる保育所等での実習を楽しみにしている生徒も三割以上いた。日常的に幼い子どもとかかわる機会は多くないと予想される現代の高校生が、積極的に子どもたちとのふれあいを体験し、保育を学びたいと考えている姿が明らかとなった。



- | |
|------------------------|
| ①保育に興味がある |
| ②保育士や幼稚園教諭を目指している |
| ③将来の生活に役立ちそう |
| ④先生や家族からの勧め |
| ⑤友達と一緒に選んだ |
| ⑥豊南短大との交流があるから |
| ⑦家庭科で保育をやってさらに学びたいと思った |
| ⑧身近に小さな子どもがいるから |
| ⑨実習に行きたい |
| ⑩その他 |

最後に、子どもの発達と保育の中で興味がある分野を3つ選択してもらった(図3)。それぞれの項目の具体的説明については、前項で述べたとおりである。「イ：子どもの発達過程」を選んだ生徒が最も多く81.5%に上った。他の項目には大きな差が見られなかった。この点は、調査を行った時期が比較的年度当初だったため、当該科目全体の内容を生徒が十分に把握していないという状況が大きく影響しているのではないかと推察される。さらに、幼い子どもとの直接ふれあいの経験がさほど多くないと思われる高校生にとり、子どもの生活や福祉といった分野の具体的内容は想起しにくく、必修の家庭科で既習したと思われる子どもの発達に関する分野が多く選ばれたと考えられる。



- | |
|----------------|
| ア：子どもの発達の特 |
| イ：子どもの発達過程 |
| ウ：子どもの生活 |
| エ：子どもの保育 |
| オ：子どもの福祉と子育て支援 |

IV. まとめと課題

金田は、「人間は生活しつつ発達し、発達しつつ生活する」^{xii}という。さらに金田は、高校生・大学生にとっては、自己の将来と重ね合わせてどのように職業を選択し、それに向けてどう学習を進展させていくかを中心に、かつ、やがての自己の創る家族の形成に目をやっていくことが、発達段階に応じた課題であると指摘する。そしてこの時期特有の、社会に出た時に突き当たるモラトリアムに陥りやすいという状況をどう支えるかが問題だと続ける^{xiii}。まさに、家庭科教育という生活を中心とした学びにおけるキャリア教育の重要性と重なる。われわれ人間は、生活を中心として生きている存在である。生活の視点を欠いたまま、職業選択だけをすることは不可能である。その時、家庭科というスコープから自分の将来を展望することで、学業への意欲へ昇華したり、社会的自立に向けた足がかりを作ったりするきっかけになり得ると考えられる。

本研究を通じ、高校家庭科「子どもの発達と保育」と幼児教育学科間での連携事業が、高校生のキャリア形成に対しても有効に働くことが示唆された。高校と大学の教員がともに協力し合い、特に高校生の教育に当たることにより、職業選択を見越した学びへの意欲付けができ、高校生のキャリア教育に十分な効果がある可能性が示されたといえる。高大連携事業がいわばイベント的な単発の事業で終わらないためにも、より一層キャリア教育の視点が重要となる。そしてさらに今後は、本高大連携事業が生徒の社会的・職業的自立へと着実にいくのか、長期的な視点で見ていく必要がある。



昨今、至る所で大学の地域貢献が求められており、地域に開かれた大学運営が必要とされている。換言すれば、大学は目の前の学生に対して高等教育を行うだけの場ではない。大学の持つ智の文化を広く地域に還元させることを目指し、社会的貢献に向けた努力を続ける必要がある。

最後に、本連携事業は筆者が現勤務校に着任する以前から、脈々と築き上げられてきた実績の上に成り立っていることを申し添えたい。この事業に携わっておられる多くの関係者各位に深い敬意を捧げたい。また、日々の授業以外にも進路や部活指導等多くの業務を抱えられながら、本連携事業に熱心にご尽力くださる岡谷東高校の先生方、共に学ぶ楽しさを感じながら、質問紙調査や写真使用に快く応じてくださった生徒の皆さんにも心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

i 中央教育審議会（1999）、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」

ii 中央教育審議会（2011）、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」

iii 酒井淳平・河井亨、（2015）、高等学校におけるキャリア教育の実践による生徒の変容―「将来の見通し」に注目して―、立命館高等教育研究（15）、145-160、

iv 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2013）

v 金田利子編（2003）、「育てられている時代に育てることを学ぶ」新読書社

vi 鎌野育代・伊藤葉子、（2010）、子どものイメージと自己効力感の変容からみる保育体験学習の教育的効果 日本家庭科教育学会誌 52(4)、283-290 他

vii 吉村祐美・荒井紀子、（2011）、「人とかかわる力」に関する高校生の意識・実態と家庭科、家庭科教育学会、例会・セミナー研究発表要旨集 54(0)、103

viii 志村結美、（2013）、家庭科におけるキャリア教育の可能性の検討―職場体験活動の現状と課題から―、家庭科教育学会、例会・セミナー研究発表要旨集

56(0)、69

ix 真中智世・志村結美、(2013)、家庭科におけるキャリア教育の可能性、日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集 **56(0)**, 107

x 内田伸子・田中京子他、(2004)、ジェンダーフリー教育の実践研究とその普及—高大連携カリキュラムの開発—、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 **2**, 101-120,

xi 北村勝朗・萩原敏朗他、(2004)、高大連携を視野に入れた大学公開講座の位置づけと課題—東北大学開放講座を受講した高校生モニターの意識調査から—、教育情報学研究、第2号、**81-89**

xii 金田利子・岡野雅子他、(1995)、「生活者としての人間発達」家政教育社、

50

xiii 同上